

カラマツ資源と需要

石河周平

はじめに

これまでのところで、カラマツ・セメントボードの施工・性能・製造法などを見てきましたが、その原料であるカラマツは、道内では戦後、特に昭和30年以降大々的に植栽されました。

カラマツの苗が気象条件の厳しい北海道でも比較的成長が早く、したがって資金回収の早い金の成る木ということで特に好まれて植栽されました。

そして、現在50万haにもおよぶカラマツ人工林があり、これらの多くは間伐期を迎えています。

しかし、石炭から石油へというエネルギー事情の変化により、当初大口需要先となるはずだった坑木の需要減、また木材価格そのものが低迷して、間伐が思うに任せない状況にあります。

カラマツは多量に出る

人工林にとって間伐は欠かせない作業です。それを行うことで将来優良な立木を得られる訳ですから必要経費なのですが、ちなみにパルプ材

の場合、買い手市場ということも手伝って、間伐費1万2千円/m³に対し、山土場渡しで8千円/m³と完全に逆ざやの状態です。山林所有者は頭を痛めています。

現在、間伐・除伐が進まないなか全般的に成長が遅く、平均胸高直径20cm以上の材は、林齢50年まで待たなければなりません。その結果、昭和60年代の10年間は15cm前後の径の材が中心ですが、その間は50年生の物も含めて年間100~120万m³程度の素材生産量が見込まれています。

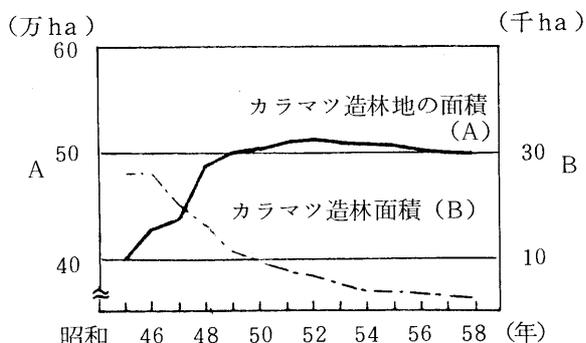


図1 カラマツ人工林造林地面積の推移 (各年3月31日現在、民有林)

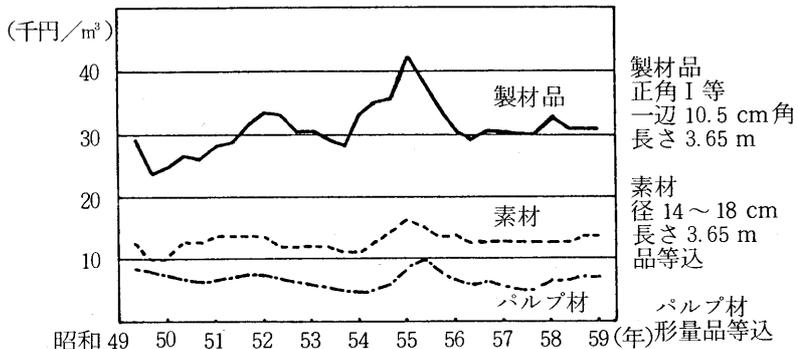


図2 カラマツの価格推移

カラマツはこんな用途に使われている

林産試験場では、来たるカラマツ時代に対応すべく多方面にわたり研究を続けていますが、今現在のカラマツは図3のように用いられています。この図からも分かりますとおり、梱包材が非常に順調

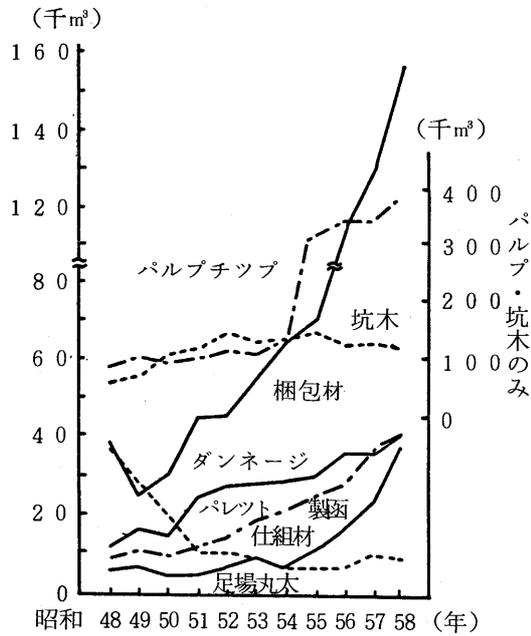


図3 カラマツ素材・製材出荷量の推移

に出荷量を伸ばしています。

これら梱包材のほとんどが京浜方面に送られていますが、競合するものがあります。それは本州で多く植栽されているスギやヒノキの人工林から出てくる間伐材、港に横着けされる外洋低質針葉樹からも同じような製品をつくっているからです。

特産品は別としても、移出される道産品の全般について言える事ですが、輸送費が原価に大きいのしかかり、輸送費を差し引いた額で発送しないと、太刀打ちできないという本質的に不利な条件を背負っています。このようなことから、梱包材が今後ともカラマツにとってうま味ある需要先であり続けるかという疑問です。

おわりに

近年、カラマツの需要がそれなりに伸び定着しつつあるなか、図1で見たような造林面積の減少、間伐の遅れなどからカラマツの将来に不安を抱く声が聞かれます。以上のカラマツを取り巻く環境の中で、今回の特集であるカラマツ・セメントボードが、間伐の促進・需要拡大の担い手として今、期待を集めています。 (林産試験場 経営科)